

20代の旅行意識インタビュー

■AIパネル⑤

- 男性 / 25歳
- 職業/年次：公務員(3年目)
- 居住エリア：練馬区
- 居住形態：実家暮らし
- 奨学金：あり
- 2026年GWの計画：なし(地元で友人とのみ)
- 2026年夏休みの計画：国内：長野(キャンプ) / 予算3~4万

<結果サマリー>

新しい刺激より絶対的な安心感の中で気の向くままに不便と向き合い、管理された日常から「主体性」を取り戻す

1. 導入

公務員3年目として「ルーチン」の仕事をこなし、実家から満員電車で通勤する毎日を送る。月2万円超の奨学金返済や物価高による「閉塞感」を抱えており、休日は「自分をすり減らさない」ために、地元の友人とファミレスや銭湯で「温存」して過ごしている。

推論：日々の生活を、社会システムの一部として「消費・摩耗」される過程と捉えている。経済的制約と職務上の規律による精神的拘束から逃れるため、オフの時間には「低コスト」かつ「心理的安全性が担保された環境」を無意識に優先し、防衛的にリソースを温存している。

FD：対象者にとって日常は「耐えるべき現実」であり、趣味や外出も「新たな消費(摩耗)」を避けるための極めて内向的・静的な活動に限定されている。

2. 2026年のGW・夏休みの旅行計画と背景意識

根拠：混雑と割増料金を「負け」と捉え、GWは地元で過ごす。一方で夏休みは、ボーナスを原資に「4万円以内」の予算で長野でのキャンプを計画している。北海道などの遠方は費用面で「無理だ」と即座に諦め、移動の自由度と宿泊費の安さを両立する「車での相乗り・キャンプ」を選択した。

推論：「納得感のない高額支出」を徹底的に排除する一方で、支払った対価に対して確実に「非日常」が得られると判断した場合には、戦略的に予算を配分する。選択基準は「効率」ではなく、経済的リスクを抑えつつ精神的な解放を最大化できる「コストパフォーマンスの良さ」にある。

FD：金銭的制約を強く意識しながらも、年1~2回の「一点豪華主義」的な旅行を、日々の節約を正当化するための動機付け(報酬)として機能させている。

3. 旅行に対する意識・旅行の意味づけ

根拠： 旅行を「自分を人間に戻すための補給」や「生存確認」と表現する。特に「予定が一切ない、広い屋外での食事」を重視し、自ら火を熾して肉を焼くプロセスに「自分の食い扶持をコントロールしている実感」を見出している。一方で、新たな出会いや観光名所巡りは「気遣い」や「情報の収集作業」になり得るとして避ける傾向がある。

推論： 管理された社会生活で欠落した「自律性」と「身体的感覚」の回復を求めている。不慣れた環境で自ら調理を行う行為は、受動的な消費者から能動的な生存者へと自己を再定義する儀式であり、外部の評価やルールに依存しない「自己主導感」の獲得が行動の核心にある。

FD： 旅行を単なる娯楽ではなく、社会的役割から切り離された「素の自分」を維持するための不可欠な生存戦略（メンテナンス）として位置づけている。

4. 旅行費用の構造と捻出の工夫（全体総括）

根拠： 「システムの一部として動かされている」日常に対し、キャンプという「不便さ」を通じて「自分の手足を使っている感覚」を取り戻そうとしている。奨学金返済や物価高という不可避な「現実」を直視しつつ、それらを「遮断」できる物理的距離と精神的余白を、最小限のコストで確保することに執着している。

推論： 「経済的な諦念」と「精神的な自律への欲求」が共存している。広大な自然や焚き火といった原始的な体験を志向するのは、デジタルや都市の刺激が「仕事の延長」に感じられるためであり、あえて不便さを選択することで、スマホや社会との接続を強制的に断ち切る「健全な逃避」を設計している。

FD： この対象者は、経済的制約下で「何もしない贅沢」を能動的に選択することで、摩耗した自己を回復させる「省エネ型の自己治癒」を実践する 20 代像を体現している。

1. 導入

【インタビュアー】 本日はお忙しい中、お時間をいただきありがとうございます。今日は 2026 年の大型連休や夏休みの過ごし方、それから普段の生活の中での「旅行」について、ざっくばらんにお話を伺えればと思っています。

まずは今のお仕事のことや、普段の休日の過ごし方、最近ハマっていることなど、差し支えない範囲で簡単に教えていただけますか？

【対象者】 ええと、今は公務員として働いていて、今年で 3 年目になります。職場は都内なんですけど、住んでいるのは練馬の実家です。

普段の休日は、基本的には地元の友達と会うことが多いですね。中学とか高校からの腐れ縁みたいな奴らと、ファミレスでダラダラ喋ったり、たまに車を出して近くのスーパー銭湯に行ったり。最近ハマっていることと言われると、これとって大層な趣味はないんですけど……強いて言えば、YouTube でキャンプ動画とかをぼーっと眺めている時間は増えたかもしれません。

【インタビュアー】 公務員 3 年目ということで、少しずつ仕事にも慣れてこられた時期でしょうか。休日は地元の気心の知れたご友人と過ごすことが多いのですね。ちなみに、最近 YouTube でキャンプ動画をよく見ているとのことですが、何かきっかけがあったんですか？

【対象者】 きっかけ……何でしょうね。やっぱり、ずっと東京のコンクリートの中にいると、たまに「あー、何もないところに行きたいな」って思う時があるんですよ。

仕事もルーチンというか、毎日決まった場所で決まった作業をこなす感じなので。画面越しに焚き火の音とか聴いていると、少しだけ現実逃避できる気がするというか。自分でもやってみたいとは思いつつ、道具を揃えるのも金がかかるし、結局動画を見て満足している感じではあるんですけど。

【インタビュアー】 「何もないところに行きたい」という感覚、もう少し詳しく伺ってもいいですか？ 具体的にどういった時にそう感じたり、今の生活の中でどんなことが「コンクリートの中にいる」という感覚に繋がっているのでしょうか。

【対象者】 うーん、具体的に何があったというわけではないんですけどね。ただ、実家から職場まで毎日満員電車で揺られて、職場の古いビルでパソコンに向かって、また夜遅くに電車で帰って……っていう。

あ、あとやっぱり「お金」のこととかを考えると、なんかこう、閉塞感があるというか。奨学金の返済も毎月ありますし、物価も上がってるじゃないですか。コンビニで飲み物買うだけでも「あ、また高くなったな」とか。そういう細かい「現実」を全部シャットアウトしたくなる瞬間が、ふとした時に来るんですよ。

【インタビュアー】 日々の通勤や、日用品の値上がり、将来への支払いといった「細かい現実」が積み重なる中で、ふとシャットアウトしたくなる瞬間がある、と。そういった感覚を持ちながら過ごされている中で、例えばお仕事以外の時間はご自身にとってどういう位置づけになっているのでしょうか。

【対象者】 休みの日は、とにかく「消費したくない」というのが根底にあるかもしれないです。体力も、お金も。

地元の友達と会うのも、気を使わなくていいからだし、ファミレスなら数百円で何時間もいられますからね。自分をすり減らさないための「温存」の時間、みたいな。そうやって 1 週間をやり過ごすために、なんとかバランスを取っているんだと思います。

【インタビュアー】 ご家族についても少し詳しく伺いたいのですが、今ご実家ではどなたと同居されているのでしょうか。

【対象者】 父と母、それから大学生の妹の4人家族です。あ、あと犬が一匹います。基本的にはみんなそれぞれのリズムで生活してるって感じですね。妹もバイトとかサークルで忙しそうだし、親も共働きなので。夕飯も時間が合えば一緒に食べますが、基本的にはバラバラなことも多いです。

2. 2026年のGW・夏休みの旅行計画と背景意識

【インタビュアー】 ありがとうございます。ご家族のこと、よくわかりました。ここからは、今年の大連休の過ごし方について具体的に伺いたいのですが、まず、もうすぐ始まるゴールデンウィークの予定は何か立てられていますか？

【対象者】 GWは、特に旅行とかの予定はないですね。カレンダー通りに休みはあるんですけど、地元友達と「どっか集まろうか」って話しているくらいで。遠出する予定は今のところゼロです。

【インタビュアー】 GWは遠出をせず、地元で過ごされるのですよね。そう決められたのには、何か理由があるのでしょうか。

【対象者】 やっぱり、GWってどこに行っても高いし、混んでるじゃないですか。今の給料とか、自由に使えるお金の状況を見ると、わざわざ高い時期に無理して行く必要もないかなって。地元友達もみんな似たような状況なので、結局「地元でいいよね」ってなります。

【インタビュアー】 「今の状況を見ると」というお話でしたが、もう少し具体的に言うと、どういったことがブレーキになっているのでしょうか。

【対象者】 さっきも少し言いましたが、奨学金の返済が月2万ちょっとあって、それに加えて物価高ですね。実家に入れているお金もあるので、手元に残る分を考えると、GWの割増料金を払うのはちょっと「負け」な気がするというか……。だったらその分を、別のことに回したいなっていうのが本音です。

【インタビュアー】 なるほど。では、その分を回したい「別のこと」についても伺いたいのですが、今年の夏休みの方はいかがでしょうか。何か計画はありますか？

【対象者】 夏休みは、8月に3~4日くらい休みを取って、長野にキャンプに行こうと計画しています。これは去年の冬くらいから「夏は絶対行こう」って友達と話していたんです。

【インタビュアー】 長野へのキャンプですね。現時点で決まっている具体的なプランを、詳しく教えてくださいませんか？日程、交通手段、宿泊先、予定しているアクティビティなど。

【対象者】 日程は8月の中旬、お盆を少し外した平日を絡めて3泊4日で行く予定です。交通手段は、友達が親の車を出してくれるので、それに便乗して。宿は……宿というか、キャンプ場ですね。長野の、なるべく標高が高く涼しそうなところを予約しようと思ってます。アクティビティは、基本的には自分たちで設営して、肉を焼いて、夜は星を見ながら酒を飲む。それだけです。

【インタビュアー】 3泊4日のキャンプ、いいですね。その「長野」という場所や「キャンプ」というプランを選んだ一番の決め手は何だったのでしょうか。

【対象者】 一番は「安く済むから」ですね。もちろんキャンプをやってみたいっていう興味もありましたけど。ホテルに3泊したら、それだけで何万も飛ぶじゃないですか。キャンプ場なら、1サイト数

千円を人数で割れば、宿泊費は浮きます。道具も、今回は詳しい奴に借りたり、安いのを少しずつ買い足したりして、極力初期費用を抑えるようにしています。移動も車で相乗りなら、高速代とガソリン代だけで済みますし。

【インタビュアー】費用面でのメリットが大きいんですね。宿泊先や移動手段を選ぶ際、他にも重視したポイントはありますか？

【対象者】「自由度」ですかね。新幹線とか飛行機だと、予約の時間に縛られるし、キャンセル料とかも怖い。車なら、最悪自分たちのタイミングで動けるし、道中で安いスーパーに寄って買い出しもできる。あと、宿泊先も「綺麗なホテル」である必要はないんです。どうせ男数人だし、寝られればいい。それよりは、どれだけ「非日常」を感じられるか、そのコスパがいい場所が長野かなって思いました。

【インタビュアー】「綺麗なホテルである必要はない」というお話ですが、今回の計画を立てる中で、本当はやりたかったけれど、費用や状況を考えて「我慢したこと」や「諦めたこと」はありますか？

【対象者】……本当は、北海道とか行きたかったですよ。涼しいし、飯も美味しい。でも、2026年今の時期に北海道に数日行くってなったら、飛行機代だけでとんでもない額になりますよね。それに、向こうでレンタカー借りて……とか計算してたら、「あ、これは無理だ」ってすぐに諦めがつかしました。奨学金の半年分くらいが一気に飛ぶのを想像すると、ちょっと足がすくむというか。

【インタビュアー】北海道は早々に選択肢から外れたんですね。今の生活の中での「生活費」と、こういった「長期休暇の遊興費」のバランスについては、どのように考えていらっしゃいますか？

【対象者】生活費は、もう「削れない固定費」だと思ってます。奨学金も、実家への金も。だから、遊興費は「ボーナスをどう切り崩すか」の勝負ですね。でもボーナスだって全額使えるわけじゃなくて、将来のために少しは貯金に回したい。結局、夏休みにドカンと使うために、GWとか普段の週末は「極力ゼロ円で過ごす」みたいな、極端なバランスの取り方になってる気がします。

【インタビュアー】ちなみに、夏のキャンプの予算はおいくらくらいをお考えでしょうか。

【対象者】予算ですね。うーん、交通費やキャンプ場の利用料、あとは現地で買う肉や酒の代金を全部ひくくめて、だいたい「3万円から4万円」くらいに収めたいなと思っています。

3泊4日なので、普通にホテルに泊まって観光地を回ったら、多分この倍以上はかかっちゃいますよね。でもキャンプなら、自分たちで食材を買い込んで焼くスタイルなので、食費もそこまで跳ね上がらないですし。

ボーナスから出すとはいえ、やっぱり将来の貯金や奨学金の返済も頭をよぎるので、この「4万円以内」っていうのが、自分の中で思いっきり楽しんでも後悔しない、ギリギリのラインかなと思っています。これくらいの予算で、どれだけ「日常を忘れる贅沢」ができるかを考えるのも、ある意味では旅の楽しみの一つかもしれません。

【インタビュアー】GWや普段の週末を「極力ゼロ円」にして、夏休みに回す。そのバランス感覚についてですが、昨年（2025年）と比べて、意識的に変えたことや、社会情勢などの影響で変えざるを得なかった部分はありますか？

【対象者】2025年よりは、もっと「シビア」になったと思います。去年までは「まあ、なんとかするか」で飲み会とかも行ってましたけど、今年は「ここで5,000円使ったら、夏のキャンプの道具が一つ買えなくなるな」とか、具体的に比較して考えるようになりました。円安のせいか、何をするにも

「高いな」って感じるのが当たり前になっちゃって。だからこそ、自分の納得感があるものにしか金を使いたくない、という意識は強くなったかもしれません。

【インタビュアー】 「安く済む」という点に関連して伺いたいのですが、都内や近場でもキャンプができる場所はある中で、今回あえて「長野」まで足を延ばそうと考えたのはなぜですか？

【対象者】 あー……それはやっぱり、「距離」というか、物理的に東京から離れたってというのが大きいですね。

都内のキャンプ場だと、結局どこかで街の音が聞こえたり、周りの建物が見えたりするじゃないですか。それだと、せっかく道具を揃えて準備しても、日常の延長線上にある感じがして、あんまりリフレッシュできない気がして。

長野まで行けば、空気も違うし、景色も全然違いますよね。車で数時間かけて「遠くへ来た」という感覚そのものが、自分にとっては大事なんだと思います。

【インタビュアー】 「遠くへ来たという感覚そのものが大事」とのことですが、その感覚が得られることで、ご自身の中にどういった変化や影響があるのでしょうか。

【対象者】 何て言うんですかね……「あ、自分はいま、仕事とか支払いとか、そういう面倒くさいことから切り離されてるんだ」って、ちゃんと実感できるというか。

近場だと、もし何かあったらすぐ帰れちゃうし、頭の片隅に仕事のことが残りそうなんです。でも、長野くらい離れてしまえば、もうどうしようもないじゃないですか。その「諦め」に近い解放感が欲しいんだと思います。

【インタビュアー】 なるほど。わざわざ遠出をすることで、物理的にも精神的にも日常を遮断する、というようなイメージでしょうか。

【対象者】 そうですね。遮断、っていう言葉が一番しっくりきます。

だから、たとえ移動にガソリン代がかかったとしても、そこは削っちゃいけないポイントというか。「安く済ませたい」という気持ちと、「日常を完全に忘れたい」という気持ちの、ちょうどギリギリの妥協点が、僕にとっては「長野でキャンプ」だったんだと思います。

【インタビュアー】 物理的に距離を置いても、今はどこにいてもスマホがつながりますし、仕事の連絡やSNS、ニュースなどが入ってきますよね。そういった中で、長野へ行くことで本当に「日常を忘れる」ことはできるのでしょうか？

【対象者】 あー……確かにそうですね。ぶっちゃけ、電波さえあればどこにいても現実には追いかけてきます。

でも、なんて言うか、環境が強制的に変わることによって「スマホを見る頻度」が変わるんですよ。東京にいると、暇さえあれば無意識にSNSを開いて、誰かのキラキラした投稿を見て焦ったり、ニュースを見て物価高に溜息ついたりしちゃうんですけど。

キャンプ場だと、火を熾したり、肉を焼いたり、暗くなればランタンの準備をしたり……。意外と「今、目の前のこと」に必死にならないと、生活が回らないんですよ。その「不便さ」が、結果的にスマホから僕を遠ざけてくれるというか。通知が来ても「今は手が離せないから後でいいや」って自然と思える。それが僕にとっては、日常を忘れるための「儀式」みたいなものなのかもしれません。

【インタビュアー】 「不便さがスマホから遠ざけてくれる」というのは興味深いですね。その「目の前のことに必死になる時間」を経て、日常に戻ってきた時、ご自身の中に何か変化はあるのでしょうか。

【対象者】 劇的に人生が変わるわけじゃないですけど、「まあ、明日からまたあの満員電車に乗るか」くらいの、ちょっとした踏ん切りはつきますね。

結局、現実からは逃げきれないって分かってるんです。奨学金も消えないし。でも、一度しっかり「遮断」して、自分の手で火を起こして飯を食うっていう、生存本能みたいなものに集中した後は、少しだけ頭が軽くなっている気がします。

【インタビュアー】 なるほど。ちなみに、3泊4日の間、ずっと同じ場所に設営して過ごされるのでしょうか？日中の時間はどのように過ごす予定ですか？何か決めているプランがあれば教えてください。

【対象者】 日中ですか……。実は、これとって何も決めてないんですよ。

あ、でも、近くに川があったらちょっと足をつけて涼んだり、あとは地元のスーパーにその日の酒とつまみを買出しに行ったり。それ以外は、多分ずっと椅子に座って、本を読んだり、ただぼーっと山を眺めてるだけだと思います。

【インタビュアー】 「ただぼーっとしている」時間が中心になるのですよね。3泊4日という期間、ずっと同じ場所で特に予定を詰めずに過ごすことに対して、どのような期待やイメージを持たれていますか？

【対象者】 「何もしなくていい贅沢」というか。普段の仕事だと、1分1秒まで「次は何をやるか」が決まっているじゃないですか。市民の方への対応とか、書類の期限とか。

だから、キャンプの間くらいは、時計を見ないで「腹が減ったら食う」「眠くなったら寝る」っていう生活をしたいです。せっかく3泊もするんだから、予定で埋めちゃったら、東京にいる時と変わらない気がして。

【インタビュアー】 予定で埋めてしまうと東京にいる時と変わらない、と感じるのですよね。同行されるご友人たちも、同じような感覚で過ごされる予定なのでしょうか。

【対象者】 そうですね、類は友を呼ぶというか。みんな「疲れてる」んだと思います（苦笑）。「せっかく来たんだからあちこち観光しようぜ」みたいな奴は一人もいなくて。どっちかっていうと、「いかに動かずに済むか」を競ってるような連中なので、そこは価値観が合ってるんだと思います。

3. 旅行に対する意識・旅行の意味づけ

【インタビュアー】 これまでの計画のお話、ありがとうございました。ここからは少し視点を広げて、あなた自身の旅行に対する考え方について伺いたと思います。まず、今後やってみたいと思っている旅行や、気になっているスタイルは何かありますか？

【対象者】 やってみたいこと……。そうですね、いつか「何にも縛られないで、日本を一周する」みたいなのは憧れますね。今は3泊4日でも「何日までに帰らなきゃ」とか「予算はいくら」って常に頭の片隅にありますけど、そういうのを全部取っ払って、気の向くままに移動してみたいっていうのはあります。

【インタビュアー】 「何にも縛られない日本一周」への憧れがあるのですよね。移動手段に関連してなのですが、「青春18切符」のような、時間をかけて安く移動する手段についてはどう思われますか？

【対象者】 18切符ですか。大学生の頃ならやったかもしれないですけど、社会人になった今は……。ちょっとキツいかな。時間はかかるけど安い、っていうのは魅力ですけど、今の僕にとっての休みって、

さっきも言った通り「リセット」の時間なんですよ。移動そのものでヘトヘトになって、帰ってきてから仕事に行くのが辛くなるのは本末転倒というか。ある程度、効率と快適さは金で買わないと、社会人はやってられないなっていうのが正直なところですよ。

【インタビュアー】 「効率と快適さは金で買う」という感覚なのですね。一方で、最近はYouTubeで絶景を見たり、イマーシブ型の施設で擬似体験をしたりする「デジタル旅行」もありますが、これについてはどう感じますか？

【対象者】 デジタル旅行……。YouTubeでキャンプ動画を見るのは好きですけど、それを「旅行」だと思ったことは一度もないです。あれはあくまで、現実をやり過ごすための「麻醉」みたいなもので。やっぱり、現地の空気の匂いとか、火を熾した時の熱さとか、そういう「肌で感じるもの」がないと、わざわざ体験する意味がない気がします。画面越しにどれだけ綺麗な景色を見ても、結局自分は練馬の部屋にいるわけですから。

【インタビュアー】 画面越しでは得られない「肌で感じるもの」が重要なのですよね。そうすると、改めて、あなたにとって「旅行」という行為は、人生や生活の中でどのような意味を持つものだと思いますか？

【対象者】 一言で言うなら……。 「生存確認」ですかね。 普段の生活って、システムの一部として動かされている感じがするんです。決まった時間に起きて、決まった仕事をして、決まった額を返済して。でも、旅行に行って、自分で火を吹いて肉を焼いている時だけは、「あ、俺、生きてるな」って実感できる。日常で溜まった「澱（おり）」みたいなものを、一回全部吐き出して、自分を人間に戻すための時間、という感じです。

【インタビュアー】 「自分を人間に戻すための時間」という言葉、印象的です。 今後、物価の上昇や社会保険料の負担、奨学金の返済といった経済的な制約は続いていくと予想されますが、その中であなたの「旅行」はどうなっていくと思いますか？ 「こうしたい」という要望と、「現実はこちらなりそう」という予測、それぞれ教えてください。

【対象者】 要望としては、もっと贅沢に、お金のことを気にせず海外とかも行けるようになりたいですよ。でも現実……。 もっと「一点豪華主義」を極めていくしかないだろうな、と思っています。 あれもこれも無理だから、普段は徹底的に切り詰めて、年に1回か2回の「ここぞ」という旅行にだけ全力を出す。回数は減っても、質というか、自分が「これだ」と思える体験だけは死守する、みたいな形になっていく気がします。

【インタビュアー】 「一点豪華主義」で質を死守していく、と。そうした状況やご自身の予想について、ご自身ではどのように捉えていらっしゃいますか？

【対象者】 「世知辛いな」とは思います。でも、嘆いていても給料が上がるわけじゃないです。むしろ、制約があるからこそ、一回の旅行を必死に考えるようになるんじゃないですかね。どこに行くか、何をするか。昔みたいに「とりあえずハワイ」みたいなことはできない分、一回一回の旅が自分にとっての「真剣勝負」みたいになっていくのは、それはそれで悪くないのかも……。なんて、自分に言い聞かせている部分もありますけど。

【インタビュアー】 制約があるからこそ一回が真剣勝負になる、ということですね。では、今後どんなに制約が厳しくなったとしても、「これだけは譲れない」「これだけはやりたい」と思うことは何でしょうか。

【対象者】 「一人じゃない時間」と「場所の広さ」ですかね。 地元の友達と、広い空の下で、ただどうでもいい話をしながら過ごす。これだけは、たとえもっと貧乏になっても、キャンプ場のグレードを下げてでも続けたいです。一人で部屋でスマホを見てるだけじゃ、絶対に得られない手応えがそこにはあるので。それすら無くなったら、何のために働いているのか分からなくなっちゃいますから。

【インタビュアー】 「一人じゃない時間」と「場所の広さ」が重要だというお話ですが、先ほど憧れとして挙げられた「日本一周の旅」についても、やはりご友人と一緒にいられるイメージなのでしょう。また、「生存本能に集中することで頭が軽くなる」というお話も踏まえ、結局のところ、あなたにとっての「旅」に欠かせない要素とは、何だと考えていますか？

【対象者】 日本一周ですか……。そうですね、やっぱり誰かと一緒にいるのがいいです。一人でずっと運転して、一人で飯を食って……というのは、僕にとっては「旅」というより「修行」に近い気がしちゃって。誰かと「今の景色、やばかったな」とか、そういう小さな共有があるからこそ、日常から抜け出せている実感が持てるんだと思います。

旅に欠かせない要素、ですか。突き詰めると、「自分の手足を使っている感覚」と「余白」の2つかもしれません。

普段の生活って、スマホ一つで何でも完結するし、仕事もシステムの上を滑っているだけ。でも、旅先……特にキャンプなんかは、自分の手で火を起さないと暖まれないし、飯も食えない。その「不便だけど、自分の力でなんとかしている実感」が、欠かせない要素の一つです。

もう一つの「余白」は、さっきの「場所の広さ」にも通じますけど、視界に邪魔なものが入ってこない、スケジュールに追われない、っていう状態のことです。その2つが揃って初めて、僕は「人間に戻れた」って思えるんだと思います。

【インタビュアー】 別の角度から伺いたいのですが、そもそも「旅行に行かない」という選択肢もある中で、あなたにとって「旅行に行くこと」はどういった位置づけなのでしょう。絶対になくしたくない大切なことなのか、それとも、なくてもいいけれどあった方がいいくらいのもものなのか、あるいは特になくてもいいものなのか。今のご自身の感覚としてはどうですか？

【対象者】 うーん……。そうですね、「絶対になくしたくない大切なこと」に近いと思います。

正直、行かなくても死ぬわけじゃないですし、生活が困るわけでもないです。でも、今の僕にとって、旅行がなくなってしまうのは……なんて言うか、出口のないトンネルをずっと歩き続けるような感覚に近いかもしれません。

普段の生活って、どうしても「削っている」感じがあるんですよ。奨学金を返して、職場では決められた役割をこなして、物価高に溜息ついて。そうやって自分をすり減らして、その先に「何のご褒美もない」ってなったら、多分どこかで心が折れる気がします。

だから、僕にとっての旅行は、単なる遊びというよりは、「削り取られた自分を、元の形に戻すための補給」みたいなものなんだと思います。回数を減らしたり、キャンプみたいに予算を抑えたりして形を変えてでも、これだけは細く長く続けていきたい。そうじゃないと、日々の「現実」を乗り切る自信が持てないですから。

【インタビュアー】 これまでの色々なお話を伺ってきましたが、その中でも「どうしても譲れない、これだけは欠かせない」という要素を、あえて1つだけに絞るとしたら、結局何になりますか？

【対象者】 1つだけ、ですか……。そうですね。

「自分の感覚を取り戻せる余白」でしょうか。

仕事でも私生活でも、常に何かに追われていたり、誰かの決めたルールの中で動かされている感覚が強いんです。だから、広い場所で、予定も立てずに、自分の手で火を起こして飯を食う。そういう「自主主導で動いている時間」がないと、多分、僕は僕でいられなくなっちゃうんだと思います。

スマホも仕事も奨学金も、全部一度忘れて、ただ「生きてるな」って実感できる空白の時間。それさえあれば、また次の日からコンクリートの日常に戻っていける。僕にとっての旅行は、その「余白」を手に入れるための、唯一の手段なんだと思います。

【インタビュアー】 すみません、そういった抽象的・概念的な言葉ではなく、具体的な要素でお答えいただけると嬉しいです。

【対象者】 あ、すみません。具体的、ですよ。……それなら、「時計もスマホも一度も気にせず、地元のいつもの友達と、ただ広い山や空が見える場所で、自分たちで肉を焼いて酒を飲んでいる時間」になります。

これをもっと絞るなら、「予定が一切ない、広い屋外での食事」です。

結局、僕が一番求めているのはそれなんだと思います。誰かに決められた時間配分じゃなく、その時の気分で「あ、今から肉焼くか」って動けること。そして、その視界に街の建物や人混みが一切入ってこないこと。これさえあれば、ぶっちゃけ宿がテントでも、行き先がどこであっても、僕にとっては最高の旅行になります。逆に、どんなに高級なホテルに泊まっても、分刻みで観光名所を回るような旅だったら、それは僕にとっては「仕事」と変わらなくなっちゃうので。

【インタビュアー】 屋外であることは、あなたにとってそれほど重要なことなのでしょうか。例えば海外や国内の都市部で、ホテルに泊まってレストランで食事をするといった、いわゆる一般的な観光旅行には興味がないということですか？

【対象者】 あー……。興味がないわけじゃないんです。いつかは海外の有名な街を歩いてみたいとか、綺麗なホテルに泊まってみたいっていう欲は、ゼロじゃないですよ。

でも、今の自分にとっては、そういう「都市部の観光」って、どうしても「情報を取りに行く作業」になっちゃう気がするんです。SNS で見たスポットを回って、写真を撮って、有名な店で並んで。それって、普段仕事でやってる「効率」とか「正解」を求めて動くのと、根っこが同じな気がして。

それよりも、さっき言ったみたいに「屋外で、何もしなくていい時間」の方が、今の自分には圧倒的に価値があるんです。誰にも何にも邪魔されずに、ただ空の下で肉を焼いている時。その瞬間だけは、自分が何かの役割を演じなくて済む。

だから、限られた休みと、奨学金を返しながら必死に貯めたお金を使うなら、今は「都市の刺激」よりも「何もない屋外の解放感」に全振りしたい。それが僕にとって、一番コスパが良いというか、納得感のあるお金の使い方なんです。

【インタビュアー】 もう一つ、「自分の手で肉を焼く」という言葉が何度か出てきましたが、自ら調理すること、特に「肉」を焼くという行為には何かこだわりがあるのでしょうか。

【対象者】 こだわり……そうですね、改めて聞かれると、単に肉が好きっていうのもありますけど、それ以上に「自分で自分の食い扶持をコントロールしてる感」があるからかもしれません。

普段の生活だと、コンビニ弁当とか、実家を出てくる料理とか、誰かが用意したものをただ消費するだけじゃないですか。でもキャンプで肉を焼く時って、火の強さを自分で調節して、自分の好きなタイ

ミングで、一番いい状態で食べる。そのプロセスを全部自分で完結させてるのが、すごく「生きてる」って感じがするんです。

中でも「肉」なのは、やっぱり一番「食ってる」っていう実感が強いからだと思います。野菜を焼くのは違う、あの焼ける音とか匂いとか。ああいう、五感にダイレクトにくる体験を自分の手で作っているっていうのが、今の僕にとっては、日々の細々としたストレスを上書きしてくれる一番の要素なんだと思います。

【インタビュアー】最後に、一人旅ではなく、「地元の友達」とどうでもいい話をしながら過ごすほうが大切とおっしゃっていましたが、旅行先での新しい出会いや交流を期待するという考え方もある中で、あえて「地元の友達」と過ごすことを大切に思うのはなぜでしょうか。

【対象者】あー……「新しい出会い」ですか。正直に言うと、今はあんまり求めていないかもしれないです。

今の僕にとって、旅行は「自分をさらけ出して、一番ラクな状態にいること」が目的なんですよね。地元の友達って、僕が公務員だとか、奨学金を返してるとか、そういう背景を全部知った上で、それでも「どうでもいい話」ができる相手なんです。お互いに気を遣わなくていいし、カッコつける必要もない。

もし旅先で新しい人と出会ったら、また「公務員をやってる自分」として自己紹介したり、相手に合わせて失礼のないように振る舞ったりしなきゃいけないじゃないですか。それって、僕にとっては結局、職場の延長線上にある「気遣い」というか、また別の意味での「仕事」になっちゃう気がするんです。それよりも、僕のことを分かってくれている友達と、広い空の下で肉を焼きながら、中身のない話を笑いながらする。その「気を使わなくていい安心感」があるからこそ、日常で溜まったものが吐き出せるんだと思います。今は新しい刺激よりも、その「絶対的な安心感」のほうが、僕には必要なんです。

【インタビュアー】本日は、日々の生活のこと、そして「旅行」に対する率直な思いを詳しく聞かせていただき、本当にありがとうございました。